

ガンプラの改造に他媒体ネタを入れるのは無しというルールはない
はずです(迫真)

おツル三等書記官

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公が色んなパロディでイチゴ味なサ○ザー様みたいにバトルでもトークでも色々はっちゃけるお話ゾ！

目次

- | | | | |
|-----|----------------|----|---|
| 第一戦 | ズワアース vs 牙狼 | — | 1 |
| 第二戦 | 天才（と言うより天災）の休日 | 11 | |
| 第三戦 | 漆黒牙狼 vs 悪の三兵器 | 18 | |
| 第四戦 | 人は見かけ通りとは限らない | 28 | |
| 第五戦 | 戦場を激震させる緑の牛魔 | 35 | |

第一戦　ズワアースVS牙狼

注意？初投稿、マイナーネタ多発、淫夢ネタも多分多発

それでもいいって方はホモだゾ：間違えた、お楽しみください

ガンプラバトル、それは自分が考え、作り上げた唯一無二のガンプラで戦う世界的競技である、

そんなガンプラバトルに夢を抱くこの青年　皇　煌雅（すめらぎ　こうが）

は、とあるガンプラのカスタムの最終工程に移ろうとした、

煌雅「あとは、一つ一つ丁寧に塗装すれば完成だ！。やつと6時間以上寝られる…」

既に時刻は12時を回ろうとしてた頃である。

煌雅「よし！あとは明日組み立てて完成だ！楽しみだなあ…」

（ ）　スヤア…

完成した達成感と共に、後払いにしてきた疲労のツケが今どつと押し寄せ、机に突っ伏して深い眠りに着いた…

しかし彼の顔は幸福の笑みで安らかな寝顔になっていた…

朝

プンスコ

煌雅「おやすみ、明日は待ちに待った大会が」「さつきまで寝てたから少しくらい大丈夫だよな?」嫌、バトルに支障が:「拒否権なんてあると思ってるの?」:1時間ほどまでなら:」

海吉「初めっからそういえばいいのに、素直じゃないなあ。」ニンマリ
怖い、ただその一言に限った。何なんだ、あの禍々しいオーラ力は、

黒騎士かな?

海吉「煌雅の家ってバトルユニットあつたよね!?ガンプラバトルやろ!新しいの作っただんだけ」ドジャアーン

そう言っ出てされたのはサザビーをベースに作られた禍々しい黒の剣と盾を構えたオリジナルのサザビーだった、

海吉「これこの前、煌雅が見てた古いアニメ見てティン!って来たんだよね!確か:ダンバイン?だったっけ?作ってみたんだよね!

ネームセンスはないから単純明快に「黒騎士サザビー」って名前にした!」ドヤア
清々しいほどにストレートな名前であるが、さっきの禍々しさを見事に回収したのが驚きだ。

しかしよく見ると、細やかな装飾、武器毎に塗装を拘ってる部分、ちゃんと原作のよ

うに羽パーツもクリアパーツで作り上げている、

煌雅 「なんちゆう完成度だよ…とんでもねえ化け物作ったなあ」

海吉 「化け物ってひどーい!!黒騎士だもん!」

煌雅 「はいはい悪うございました、とりあえず始めるか、」

海吉 「うん!早くやろ!」

2人はそれぞれの位置に立ち、ガンプラをセットする、

海吉 「あつ!どうせならあの掛け声で始めよ!あれ好きなんだよねえ!」

煌雅 「いいゾ!これ、それじゃあ」

煌雅 海吉 「ガンダムファイトオ!レディーゴオオー!!」

フィールド 地上、ギニア高地

海吉 「凄いいねえ、掛け声とフィールドがピッタリマッチしてるよ…」

あつそういえば煌雅ってどんなガンプラ使うんだろ?…あつ!煌雅のガンプラ…つてえ何あれえ!」

煌雅のガンプラ…それは

海吉 「百式…違う、アカツキ?でも無い…なんなの?あれ、」

煌雅 「種明かしといこうか!こいつはバルバトスをベースに作り上げ、最近ハマったドラマの主人公をベースに作り上げた…」

ガンダム・バルバトス 牙狼だ！

BGM 牙狼くSAVIOR IN THE DARK (わかる人は脳内再生、ど
うぞ)

海吉「バルバトス…牙狼？…はっ！嘘でしょ！？もし考えてることが正しければ、今煌雅が装備してるのは…」

煌雅「もちろん牙狼剣のみだ、」

海吉「随分舐めたことしてくれるねえ…ちよつと怒ったよ、

スウー フウー ぶっ○せ！ファンネル！」

余裕で規制音のなる発言と共に黒騎士サザビーの羽パーツが開きサザビーのファンネルがバルバトス牙狼に襲いかかる。がしかし、

煌雅「忘れたのか？黄金のMSの中にはビームを反射する機体もあるって事を！」

周囲に展開されたファンネルが放ったビームを避けもせず棒立ちで受けた！しかしビームはそのまま歪曲し反射そしてそのまま別のファンネルへ命中した。残ったファンネルも、牙狼剣で一刀両断し、そのまま黒騎士サザビーへダツシュした！

海吉「うそお!!アカツキみたいな事まで出来るの!?!こうなったらあ！」

黒騎士サザビーも負けじと剣と盾を構えバルバトス牙狼へ突っ込んで行った！

2人「うおおおおおー!!!」 ガイイン!!

激しい火花が上がるほどの衝突と共に鏢迫り合いが起る！

その後、1度切り払いからのバックステップで両者体制を立て直す、

そしてその刹那、急加速し、ふたたび攻めにはいつたのはバルバトス牙狼だった！

煌雅「すげえなその、黒騎士サザビー！パワーが並のガンプラとは全然違うなあ！」

海吉「フフーン！でしょ、大人しく押しつぶされるお！」

もう一度攻めに入ったバルバトス牙狼の一振りを捉え、盾で凌いだ黒騎士サザビーは今度はガンプラ自体の馬力で思いつ切り断崖へと突っ込み、バルバトス牙狼を押し潰した！

煌雅「うおおっ！やばい！このままだと完成2日目でスクラップだ、

くっそお！しやらくせえ!!」ドォーン！

突如爆発音と共に土煙が立ち込め、辺りは殆ど見えなくなってしまうた、バルバトス牙狼の手応えも急に感じなくなったので1度煙のない所まで下がる黒騎士サザビー、そして煙の中から炎に包まれたバルバトス牙狼が出てきた。

海吉「えっもう戦闘不能？…いや違う、あれビームだ！ビーム粒子が炎のように見えるんだ！」

煌雅「フアントムガンダムのパーツを1部流用して本作の烈火炎装を再現した。それだけだと見掛け倒しだから、ついでにEXAMシステムも組み込んだいた」

もはやなんでもありのようなカスタムであるがこれも皇 煌雅という天才（天災）が可能にしたガンプラの底力である。

海吉「んんー、EXAMかあ、しゃーない、…やってやろうじゃねえかこの野郎！（杉谷拳士）」

突如黒騎士サザビーからもどす黒いオーラののような物が放たれる。

海吉「ただのEXAMだと思わない方がいいよお？」

煌雅「まさか、お前のそれって…」

海吉「そう！H A D E Sを組み込んでるよ！果たして勝てるかなあ？」

完全煽りスタイルで煌雅を挑発する海吉、

だが煌雅は狼狽えず、むしろ挑戦的に構えた！

煌雅「やりますねえ！ならば1発でケリを付けようかな！」

そう言い放つや否や、コマンド入力後、また一機急速に接近するガンプラが現れた。

???「ブイイヒヒヒーン!!!」

海吉「そんなのありい!？」

煌雅「今はやってないが、元々こいつも装備の1つでもあるんだぜ！」

風雲再起 轟天とでも名ずけておこうかな！イヨっ！」

ネーミングの義も濟ませ、風雲再起 轟天に跨るその姿、まさに昔どこかで見た、魔

戒騎士そのものである、

煌雅「もちろん斬馬劍（轟天の右横にマウントしてあった）もあるぜ！激アツだろオ？」

海吉「もはやなんでもありみたいだね、こっちも切り札諸々フルオープンだよ！」

その時海吉の黒騎士サザビーが赤みを帯び始めどす黒いカラーが少し黒混じりの真紅に染まり尽くした！

煌雅「げっ！お前！トランザムじゃあねえかよそれ！てかどこにGNドライブ隠してたんだよ！」

海吉「ん？バックパックは元々これ隠すためのダミーみたいなものだからさ、能ある鷹は爪を隠すって言うじゃん？」

煌雅「さいですか、逝くぞお！海吉イイ！」

海吉「かかってきなさい！煌雅アアア!!!」

二機のガンプラが真っ向から突撃の構えで攻め込む！

そして衝突した衝撃で辺りは爆煙を起こす。

激しい土煙の中から出てきたのは：

バアツ!!! 轟天「ブイイヒヒビーン!!!」

煌雅のバルバトス牙狼であつた!

battle end

海吉「んんー!!また負けたあ!」

煌雅「まあまあ気にするな、勝負は最後まで熱くならないもんだぜ?」

海吉「だつて!まさか決闘風に行くみたいなこと言つといて、突きのか前から急に切り払いに変えるんだもん!」

そう、それは少し前に遡る、

煌雅も海吉も、互いに突きの構えからの突撃であつた、

しかし煌雅は海吉の真つ直ぐな性格を見事に読み、一寸先のところで切り払いの構えへと切り替えたのであつた、

これにより黒騎士サザビーの肘から先を切りながらそのまま斬馬剣の持ち味のリーチを活かし、胴体もそのまま切り裂き、当たるはずの剣を少し仰向けの体制で避け、見事な完全勝利となつたのである!

煌雅「お前は盛り上がりすぎるとすぐこういうの乗るからなあ、笑笑 あれえ?もしかしてオコ?オコでいらつしやるんですかあ?」

(ゲス顔)

海吉「…ろす…」

煌雅「へっ?」

海吉「殺す…ぶっ殺してやる!」

煌雅「アッアッアッアッ! まで! やめろオ! カッターはまじでしやれにらんいか
らね!?!」

海吉「ぶつつ殺オオす!!!」

煌雅「ちよっ! ちよつと待つて下さい! 待つて! 助けて! お願いしますつて!!
うああああ!!!」

その後服だけがズタボロになつた煌雅が泣きながら暗い部屋に独り跪いて震えてい
た…しようがないね!

第二戦 天才（と言うより天災）の休日

ガンプラバトル界に新たな旋風が到来しようとしていた…

そう、カスタムの限界を知らず、ガンダムシリーズのみに囚われない、非常に自由な発想から作り上げられる彼のガンプラは作品愛も相まって一つ一つの完成品がかなりの完成度となっている、

ビルダー部門ならば世界ではもはや敵無しとまで評価されるほどである。

まさに天才（と言うより天災）である。

そんな天災こと皇 煌雅は今…

くくセイツセヤー!!! BGM 聖闘士神話（ソルジャードリーム）

煌雅「ああく→たまらねえぜ」

SAN Y Oの人気スロット、聖闘士星矢 海皇覚醒を打っていたのであった！（パチスロ全くやらないみんなゴメンね！）

くく空く高くく

煌雅「（？，ω，）？f uー!!」

とんでもないほどノリノリである、

この台はとてども当たりが重たい分期期待値が1350枚というかなりの一撃台であるのだ。無理もないね（，ω，）

ちなみに1350枚が、どれだけなのか想像できない人のために言うと、

最高レート20円なので1350×20≡27000つまり27000円の期待
が持てるのである。（まあ下ブレしたり上振れしたりもあるから鵜呑みにしないでい
けどね）

まあそんな説明は置いといて、

この台は爆裂する時はかなり時間がかかるので、スキップしましょう、
それでは皆さんご唱和下さい！

せーの！【キング・クリムゾン!!】

3 時間後。

煌雅「やったぜ、」お札扇子ヒラヒラ

なんとも腹立たしい登場の仕方である、どこぞの双子座の黄金聖闘士にギャラクシアンエクスプロージョンをして欲しいものである

煌雅「んーかなりお財布が潤ったからなあ、やったことないこもやってみようかな！」
 そう言い放った煌雅は、スキップしながらパチンコ屋から離れていった。

煌雅「この後はもーおとーskip skip skipなんてね」
 傍から見れば気持ち悪さ前回である。まさに天災である

そんな煌雅はあるものに目を光らせた。

煌雅「…ん？こんな所に書店なんてあったんだあ、気になるなあ…」

(この時点で筆者が出そうとしてるヒロインを当てた君も天災ゾー)

煌雅「なんか変な声が聞こえた気がしたゾ…まあいいや！入って見よう」ガラガラ
 煌雅「…誰も、居ない？のかな。…すみませーん！」

煌雅が、一声かけたその時ひっそりと本棚の後ろから1人の女性店員の姿が現れる
 ???「あつ…いらつしやい…ませ。」壁—ω・・—チラツ

この時、この一瞬が！皇 煌雅の人生最大の衝撃の稲妻が走る！

煌雅「…」

そう、この時煌雅は、「?恋」 という真紅の稲妻が降り注いだのだ!

??? 「あの…この書店の、お客様…ですよね?」

煌雅 「…はっ!びっくりしたあ…」

??? 「あの、驚かせて、しまった…でしようか?」

煌雅 「あー!いえいえ!全然大丈夫ですよ!ちよつと今日の前にアテナ様が降臨したのかって言うほどの真紅の衝撃が走ってましてですね!アハハ…」

??? 「フッフ面白いお方ですね、お客様は。」

煌雅 「お褒めに預かり光荣ですう!僕のことには煌雅って気安く呼んじやつて下さい
」デレデレ

??? 「こうが…さん、ですね。素敵な名前ですね。」

煌雅 「そうです!煌雅です!はっ!そうだ、お姉さんのお名前も聞きたいなあくな
て!」

??? 「私の名前、ですか? 私は 鷺沢文香って言います」

煌雅 「文香さんかあ!いやあいいですねえ僕の皇つて苗字を鷺沢に変えたいぐらいで
すよお」かなりデレデレ

文香 「あつ、あの!それは、少し早急…と言うより、とても、順序が飛躍し過ぎてい
るのではと…」

煌雅「あつ、確かに…これは失礼しました。」キリッ（…ω…）？

文香「いえ、そんなにかしこまらなくても…」

煌雅「アハハ…あつ、そうだ！この店の張り紙つて本当にやつてるんですか!？」

文香「張り紙…あつ店内貸出のことですね、やってますよ。」

煌雅「本当ですか！やつたあ。早速その店内貸出をして欲しいのですが、いいですか？」

文香「かしこまりました。それでは、コーヒーのサービス込で、時間無制限、料金は10000円になります。」

煌雅「はい！どうぞ！」

文香「…あつ、あの…すみません、10000円なのですが、何故1万円をお出しになるのですか？」

煌雅「あなたと過ごせるというオプション料金もかな？つて」

文香「お気持ちはとても嬉しいのですが、流石にこれは受け取れません…」

煌雅「デスヨネー。まあ真面目な話コーヒー片手に本を読みながら文香さんとの時間を過ごせる…最高じゃないですか！」

文香「…そんなに喜んで頂けるのは、恥ずかしさもありますが、嬉しくもあります…」

／／／／／

煌雅「まあともあれ早速、本読ませてもらいますね！席はあそこの窓辺の所お借りしてもいいですか？」

文香「はい、あそこもこのサーブスでの席なので、どうぞ。」

煌雅「あつりがとうございます」

その後煌雅は夢のようなひと時を過ごし、家路に着いた。

煌雅「いやあ最高だったあ。文香さん、可愛かったなあ〜！やっぱいい、アイデア全然浮かばねえー！文香さんのことしか考えられねえ！ゼロは何も答えてくれないだろうから今日はもう寝る！

…ダメだ！寝られん！うああああ!!」

まるでお手本の如き思春期男子真つ盛りである…

この日は、ガン普拉を一切触ってないのに徹夜をする羽目となった。

BGM ジョジョの終盤で流れる to be continued のアレ

文香「煌雅、さん…ですか。」

月明かりだけが照らす一人部屋の中で鷺沢文香はそう眩き、柵に1つ飾ってあるあるものに手をかけた。

文香「彼、どこかで見覚えが…ありますね。」

月明かりが広まり、手をかけた先が顕になる。そこには…

月明かりに照らされ、可憐なフォルムとプロも青ざめるほどの完成度のオリジナルカ
スタムのキュベレイが飾られていた…

t i n u e d

t o b e c o n

第三戦 漆黒牙狼 v s 悪の三兵器

ちんちんのうらすじ！…間違えた、ぜんかいのあらすじ！

(何やってんだ俺)

セイツセヤー！からのー？恋という名の真紅の衝撃が皇 煌雅の胸を貫いた！ ス
カレットニードルアンタレス!!

ということ第三戦はつじまーるよー！

皇 煌雅は今日も一日作業用デスクに齧り付くかの如く作業に勤しんでいた。

煌雅「あぐあぐ…」

いや、ちよつと待って、ほんとにデスクにかじりついてない!?やめよ?ほんとにそう
言うの!?(ナレーター業務放棄)

煌雅「…俺疲れてんのかな…何でデスクに齧り付いてたんだ?」

いやほんとだよ、疲れてるよりか、憑かれてるとすら思ったわ(呆れ)

…コホン、さて彼もまた正気に戻ったみたいなので本編に戻ろう、

煌雅「まあとつくにやりたいことは出来てるんだけどね、」

誰かこの天災をぶっ飛ばしてくれ：

煌雅「よし！そしてたら早速いつものお店でテストプレイだ！」

そういつた彼はガンプラを、専用のスポンジ入のケースに大事に詰め込み、バトルポート付きのガンプラショップへ疾走した。

ガンプラ&バトルスペース「？ばとるぶらねつと」

煌雅「おっさーん！来てやったぞー！」

店長「おつ来たかわんばくボウズ！くらえ！！南斗水鳥拳！」バアツ

煌雅「ハッ！まだまだだな！ 南斗！天翔十字鳳オオ!!!」バアツ!!

店長「グハア!!：やるね：煌雅クン：」

煌雅「せめてアインみたいに「やるじゃない」ってあのニヤケ顔付きで再現するところだべや：」

まあ、色々とツツコミどころのある挨拶である（そもそも南斗聖拳で挨拶する時点で人外クラス：）

店長「テストプレイしに来たのかい？」

煌雅「そ！」

店長「いいよ、つて言いたいところなんだけどさ、」

煌雅「?、なんかあったん?」

店長「実はね…」

店長曰く、少し前に来た3人組の客がテストプレイを先にしてた子供達に乱入参戦の形でバトルを行いそのまま完膚なきまでに負かし、子供たちが泣いて帰ってからのというものそのままバトルポートを占領してしまったとの事である。

煌雅「あのさあ、店長も強く言いなよ?子供たちも不憫で可哀想だよ…」

店長「そうするべきなんだけどさ…あの子らガラ悪過ぎて…」

煌雅「ここまで意気地無しな店長初めてだぜ…」

店長「このままでと不良の溜まり場みたいに親御さんから見られて売上も減って…この店を畳まなきゃかも…うう…」

この店を畳まなきゃ…この店を畳まなきゃ…この店を畳まなきゃ…

煌雅の胸の内でその言葉が木霊して行き、彼の目つきは獣の眼に変わった。

煌雅「安心しな、あいつらちよつと捻ってくる。」

店長「こつ、煌雅クン?暴力沙汰はダメだからね?」

煌雅「分かってる」

そう言うとは彼は3人組のいるバトルポートへ

バアン!(ドア大破) 3人組「んあ?」

この損傷がバトル終了後にただ関節パーツ等が外れてそう見えるようになるか、最悪修復不可能なまでに、破壊するかもしれないかが、ダメージ設定の違いである。

当然リスクがかなり高いので

男子C 「はあ!?!ふぎけんな!こっちは傷が着くのすらゴメンなんだ!ダメージ設定Aなんてたまつたもんじゃねえ!」

当然の反応である。しかし2人は、

男子A 「いいよ、それでやろう、」

男子B 「お前のガンブラ、グチャグチャにしてやるよ!」

なんとも挑戦的である。

店長 「はつ、はわわわ…うちの店でダメージ設定Aだなんて…初めてだし、不安だよ。煌雅クン、大丈夫かなあ。」

そんな店長の心配も我構わずに煌雅はガンブラを準備する、

そしてこのバトルで彼は天才ではなく天災と呼ばれる程の実力の片鱗を彼らに見せつける。

BGM 悪の三兵器

男子A 「フォビドゥンガンダム、出る」

男子B 「レイダーガンダム、行くよ!」

男子C 「カラミティガンダム、出るぜ！」

3機は出撃と同時に各自軌道を整え、変形したレイダーの上にカラミティが乗り、原作と全く同じような連携でステージに向かう。

煌雅 「そう言えばこの小説で俺の出撃シーンなかったよなあ」

頼むから真剣なバトルムードが壊れるのでメタ発言はやめて頂きたい：

煌雅 「ガンダムバルバトス 牙狼 漆黒、出る！」

彼は出撃と同時に漆黒のパーツを展開し蝙蝠のような羽を広げ、一気に加速した。

そう、これが煌雅の新たなアイディアである。

(元ネタは牙狼 GOLDSTORM翔から取ったアイディアゾ)

煌雅 「見えてきたな、」

互いにスピードを緩めることなく真っ向から向かっていく！

男子C 「オラオラ！行くぜえ！」 ドカドカ！

惜しげも無くカラミティは、搭載された銃火器をぶっぱなして行き、

激しい牽制を行う。だが、

煌雅 「単調だな、」

そう眩きすかさず右へ回避しやり過ぎず、しかし！

男子A 「はっ、読み読みなんだよ、」 ギューン

フオビドウンの背中ユニットを頭部へと、展開し高エネルギーのビームを放った、しかもそのビームは不規則に軌道を変える非常に避けるににくい攻撃であった、

煌雅「ちい！ガラ悪い3人組ってそういうことかよ！SEEDの三馬鹿の事かよ！」

男子B「三馬鹿って舐めたこと言ってるとほら！そりやああああ!!滅殺!!」

今度は別方向からレイダーのハンマーが勢いよくこちらに飛んできた！

煌雅「うお！」バツ！

間一髪ハンマーの攻撃も避け、何とか凌ぎきる、だが彼らの猛攻はまだまだ続く。

男子B「でりやアああ!!撃滅！」

男子C「そおらぶつ壊れるオ！」

男子A「落ちろお！」

煌雅はついに痺れを切らすのであった。

煌雅「調子に…乗るなあアアアあああ!!!」キユイイー!!

そう煌雅は叫ぶと、胸部の黒い装甲が展開し、発行するクリアパーツが顕になる！そ

してなんと三機は

男子C「はっ？」

男子A「うっ！」

男子B「えっ？」

各々が反応した時にはガンプラの起動が強制停止され、そのまま落下していく。

この機能はガンダム〇〇で登場する、ヴァーチェ ナドレ形態がもつ、

「トライアルシステム？」であるのだ

これをアレンジし、漆黒牙狼にするための追加装甲パーツに埋め込んだのである。

煌雅「これ、急造品だから10秒しか持たないけど、お前ら程度ならそれくらいで十分だ。」

そう言った後彼は急降下し、3機のガンプラへ無慈悲なトドメを刺した。

バトル終了後

男子B「てめえ！こんな勝ち方して卑怯だぞ！」

煌雅「このシステムはかなりエネルギー消費するから相応のリスクもちゃんとするから卑怯とは言えねえな、後、泣き言言うなって言ったのはお前らの方だけ、恥かく前に帰んなボクちゃん」

3人組「グッ……」

何も言い返せなくなる彼らはそのまま店を出ていった。

店長「煌雅クーン！凄かったよ！あの一瞬で3人も倒しちゃうんだから！」

煌雅「……」

店長「どうしたんだい？具合でも悪くなったの？」

煌雅「…いや、なんでもないっす。今日はなんか気乗りしなくなっただんで帰りますわ、」

店長「…そっか、また今度遊びに来てよ、」

煌雅「…はい、また来ます」ニコ

この日見せた笑顔はどことなく悲しさも紛れたような笑顔だった。

店長「…まあ昔から知ってるけど、懲らしめるためとはいえあんなやり方をしたわけだからねえ、心残りもあるんだろうね。」

店長は何となくではあったが煌雅の気持ちを悟った。

店長「さて、掃除でも…あつ、」

店長の視線の先には、煌雅がカチコミする時に思いっきり蹴破った無残に倒れたドアの姿があった…

店長「…もしかしてこれのせい？てかあいつ弁償もしないで帰ってっちゃったよオー！」

哀しき店長の叫びが店の中で木霊して行ったのであった。

煌雅「…もうちよつと正々堂々とやるべきだったな。どうしてこうも、頭に血が登るところなるんだろ。」

煌雅はこの日悩みながら夕暮れの中、家路に着くのであった。

??? 「あれが、皇 煌雅君かあ、フフっ美味しそうなエ・モ・ノ♡」

そんな煌雅を妖艶な、獲物を狙う視線を向ける新たな波乱が潜んでいた…

t o b e c o n t i n u e d

第四戦 人は見かけ通りとは限らない

さて皆さん、(Gガンダム冒頭のオジサン風に)

今回のお話は待たずに待った鷺沢文香さんの登場です！

…イエエーイ!!! (サンシャイン池崎)

おっと、取り乱してしまい失礼しました。

そんなわけで、第二戦にて終盤に文香さんガン普拉バトル参戦フラグをピンピンに勃たせて終わりましたね? いよいよそのフラグの回収へと向かいます!

まずはひよんなことから文香さんがガンプラ作りも嗜むというのを煌雅が知ることになります

ガンプラもラブストーリーも順序つてのが大事なのです。

それではガンダムファイト (今回はないけど…) レディゴォー!!

朝6時59分

皇 煌雅の朝は早い…

私は今、今か今かと待ち遠しくて仕方ない、

配達員「宅急便です！」

文香「!! はい、今、行きます」トテトテ

配達員「こちらにサインと印鑑をお願いします」

文香「分かりました、どうぞ」カキカキ ポンッ

配達員「ありがとうございます、では失礼しました！」

文香「ご苦勞様です」

そう、この箱の中身なのです、

ガサガサ パカッ

文香「…これです。これなんです」

アストレイレッドフレーム改のガンプラがやっと手に入りました!

文香「長かったです…某ΔフォームVtubeの影響で近場のお店でも予約待ちばかりだった所を根気よくキャンセル待ちをし続けた結果ついに…やっとです。」

まさに文学少女という2つ名がぴったりの驚沢文香が、アストレイレッドフレーム改の箱を抱えながらにこやかな表情を浮かべる姿を誰が想像出来ただろうか!

そう! できるわけが無い! (作者ももちろん)

それは、皇 煌雅も同じであつた!

煌雅 Side

煌雅「…あのお…ごめんください」— 壁 — ㊦・㊧) チラ

文香「!!! こつ煌雅、さん?!いつから居たのですか!」ビクウツ!

煌雅「すつげえ言い難いんですが、配達員さんがこのお店出た辺りからいました…声もかけたんですが…」

文香「…そんな、お恥ずかしい所を…お見せしてしまいました／＼／＼／＼」

煌雅「そつ、そんなことないですよお! (結婚したい (確信))」

文香「…その、引いてしまいますよね、いい歳してガン普拉だなんて…」

煌雅「そんなことは無いです!!」(「・ω・」)「バアン!」

文香「はうっ!」ビクウツ!

煌雅「あつ!ごめんなさい!僕もガン普拉が好きでつい熱くなっちゃって…」

文香「あつ…あの、私も変に怖がつてすみません…その、ガン普拉、好きなんですネ」

煌雅「文香さんと同じくらい大好きです (迫真)」

文香「あつ、あの、そう…ですネ、」

煌雅「(うわあ、かなり引かれたよなあ…やっちゃったかなあ…)」

文香「お気持ちは、とても嬉しいです、お友達として…ですよね?」

煌雅「へっ?ああ!そう!そうですよ!どこぞのキャプテンが言ってたように僕に

とってガンプラは友達ですからね！」

文香「…ふっつやっぱりおかしな人ですね、煌雅さんは。」ニコツ

煌雅「…よく言われちゃってます／＼／＼」

照れ隠しに煌雅は頭を少しかいて誤魔化すがあまりにもニヤケまくりでかなり子供っぽい状態になっている。

煌雅「いやあ、しかし文香さんはガンプラも作るんですねえ！僕も今度文香さんと一緒にガンプラ作りたくないなあ〜なんて。」

文香「…煌雅さんが宜しければ、今、一緒に…作りますか？」

煌雅「ほっ！本当ですかあ！やったあ!!」

文香「このプラモデル、買ったのは買ったんですが、マスターグレードなので…お上手な人と手をつけたかったところなんです…」

煌雅「そうだったんですね！でも大丈夫ですか？今日つてもう開店してるのでは…」

文香「今日は伯父の用事もあって早閉めするんです、その時にでも良ければ…」

煌雅「是非やらせてください！」ズイッ

文香「わっ…ありがとう、ございます。ではまた後ほど、」

煌雅「あっ！もひとつ忘れてた、新しく始めたモーニングセットも頼もうかと…」

文香「その…すみません…今日はやってないんです…」

煌雅「オウノオオオー！ジーザス！！…ではまた後ほど…来ますね…」涙目

文香「大丈夫です、楽しみに待ってます」ニコッ

この瞬間！煌雅の胸の恋心にデユランダルが突き刺さる！

ピロリロリ パラパラパーラーパーラーパーラー ソイツガキリフダダ！！

その後家に着いた彼は部屋の中一人灰になり開けていた窓から来た風と共にサラサラと音を立て消えていった。

去り際に煌雅の口から、「文香さん尊スギイ…」と聞こえたきがしたが気のせいであろう…

文香 s i d e

文香「ふう…煌雅さんにガン普拉が好きなのがバレてしまいました…でも煌雅さんもガン普拉が大好きな方で良かったです…

…皇、煌雅…ハッ！彼は、もしかして！」ダッ！

大事な事を思い出した私は慌てて自室へと向い机の鍵付きの棚を開けひとつのペンダントを手取る。

B G M 機動戦士ガンダムO O e d 罨

そして私はそのペンダントのネジの部分の部分を回し、蓋を開いて初めて確信した。

文香「やっぱり…彼は、あの時の」

ペンダントには、写真が挟まっており、そこには、幼い頃の私と、もう一人、昔の皇
煌雅らしき少年が隣で無邪気な笑顔で笑っている姿があった：

第五戦 戦場を激震させる緑の牛魔

煌雅「…これだ、これこそが俺のロマンをくすぐる新しいガン普拉だア！」

そう一人で叫んだ煌雅は緑主体のカラーのガン普拉をケースにしまい早速いつものシヨップへと向かうのであった。

海吉「こうがー遊びに来たよー…ってあれ？さっき叫んでたの聞こえたのに…」海吉ー！宿題ちゃんとやってるのかい!?「ヤバ！お母さんに怒られる！」

午後1時 ぼとるぷらねっと

煌雅「店長ー！いらっしやいましたぞー」

店長「やあ煌雅クンいらっしやーい」ニコニコ

煌雅「やけに気持ち悪い笑顔だな…何かあつたん？」

店長「ふっふっふ、この後午後のバラエティ番組でなんと！四条貴音様^が出演するんだよー！楽しみで仕方ないんだよ！」

煌雅「そういや店長は四条貴音ファンだったもんな、気持ちわかる、スゲーよくわかる…けど、なんでそれを仕事に見ようとしてんだア！テメエ！ナメてんのか！客を

よオ!!ムカつくぜエ!!」ガンガンガン!!

店長「ちよ!痛い!辞めて!なんで!なんでギアツチヨなの!しかもいつもこんなで怒らないじゃん!」

煌雅「いや、1回やってみたかったから、(⊠ ⊠) スン

店長「殴られ損じゃんかよオ:」シクシク

あまりに理不尽な下りを一通り終えて、煌雅は思いついたように要件を言った。

煌雅「あつ店長」

店長「イテテ:ん?なんだい?」

煌雅「この近くでバトロワ式のガンプラバトルやる場所とかってない?」

店長「バトロワかあ:あるにはあるけど、かなりの人数の大会だけど大丈夫?」

煌雅「へえ:実験には良さそうだな:」

店長「(うわあくまた悪い顔してるよオ:) 今度は何をしでかすんだい?」

煌雅「この紙に書いていた、場所はどこ?」(?・ω・) ってがみ ヒロリン

店長「(ン?これって:) サイバーアーツ本店でメディアも絡めた会場がそうだよ、20分で参加応募メ切だから、急いだ方がいいんじゃないか?」

煌雅「サイバーアーツ本店:って結構ギリギリじゃあねえか!とりあえずサンキュー

な店長!」ダッ!

店長「転んでガンブラ壊すんじゃないよー」フリフリ
嵐のように現れ嵐のように去り、そしてバトル会場で今、皇 煌雅は大嵐を起こそう
としてた。

店長「いやあしかしこの紙になんて書いたんだろいな、やけに大胆な「てがみ」だからなあ…」ペラ

「?はいけい、花火しでかすデス」

店長「…煌雅アア!!!大会でそれは辞めるんだアア!!!うおおおおお!加速装オオ置
!」ダッ!

午後1時55分 サイバーアーツ本店バトルロワイヤル大会会場

受付係「あと5分で参加応募の方を締め切らせて頂きまーす!」

会場は百数十人も参加応募を済ませたファイターと、マスコミとカメラマンでごっ
た返しになっていた。

世界大会予選とほぼ同等の盛り上がりを見せたこの大会は、本来は普通のバトルロワ
イヤル大会のはずだったが、実はTwitterでメイジンカワグチがお忍びで参加す
るとい眉唾ものの情報が出回りこのような状態になった。

そんな大会会場に、

煌雅「邪魔だア!!!」ダッ!

会場丸々ひっちゃかめっちゃかさせまいと現れた大嵐が来た。

煌雅「参加応募は：ハアハア、まだ：間に合いますか？」

受付係「滑り込みですがまだ間に合いますよ、」

煌雅「良かったあ：参加します！」

受付係「かしこまりました、では、こちらのシートにお名前の方をお願いします」

煌雅「かしこまり！」

こうして煌雅は、無事受付を終わらせ、いよいよ大会が始まるうとしていた：

午後2時半 大会用巨大バトルフィールド前

司会「皆様大変お待たせ致しました。只今より！ガン普拉バトル、バトルロワイヤル

マッチを開催致します！」

うおおおおお!!うおおおおお!!

大歓声の中フィールドでスタンバイを終えたファイター達は各々様々な反応を見せ

た。煌雅は：

煌雅「んー早く始まんないかなあ：」

恐ろしい程までのマイペースであった。

司会「では皆様、バトルベースにご用意したガン普拉をセットしてください！」

煌雅「おつもう始まる始まるう！」

そう言いながら煌雅は、ケースから緑の巨大な銃火器をマウントした重量級クラスのガンプラを用意した。

司会「それでは、バトルロワイヤル開始です！」

煌雅「1分でカタをつけてやる、皇 煌雅 ガンダムフォートゾルダ！撃滅開始！」

ゴオオオオオオ!!!

フィールド 地上 ジオン公国採掘基地

BGM 「赤い彗星」

ファイターA「へっ、メイジンカワグチが出るって言ったのにそれっぽい人はいねえなあ……どーなってるん「ドゴオン!!」だア!!」

煌雅「ぼやっとしてるとこうなるぞー」ゴオオ

颯爽と一機撃破し、そのまま走り去るフォートゾルダ。

ファイターB「随分とのろまそうな火力バカなガンプラだな！」

煌雅「ロマンを知らねえやつはご退場願おうか！」ダダダダ！」

ファイターB「はっ、当たらねえよ！俺のエアマスターを舐めんよオ！」

煌雅「いきなり可変機とかよ、でもこっちに突っ込んでくるなら！」ガツ

そう言うとう煌雅は左腕に装備してた重厚なシールドを敵のエアマスターに構えると、ガコッ！ボボボボボ!!ヒュンヒュンヒュン

盾の装甲が開き、なんと中から大量のミサイルが発射された、

ファイターB「なっ！マジかよ！やべえやら…」

ドドンドォーン!!

爆 発 四 散！

煌雅「見事なワザマエで…」

そうこうしてる間にかかなりの数が減りステージの縮小化が行われ始めてきた。

ファイターC「やべえ！行動範囲が狭くなつて場外になつちまう…あつ…」

こうした、場外での脱落もチラホラではじめても来てきた。

煌雅「あともうちよいせばまればアレをやるか。」

そう言った煌雅は、基地周辺から少し離れた見晴らしの良い高台に移り特殊コマンドを入力した。

??? 「ツツ!!殺気…」ボソツ

煌雅「へっエンドオブワールドなんてよく言ったもんだよな…」

ファイナルベント

仮面ラ○ダー龍騎で聞いたことあるような電子音と共に、全ての武装と、追加装甲等がパージを開始し、フォートゾルダの前になんと、ガンプラで再現を行ったマグナギガが完成し、全武装を基地に定め後ろからフォートゾルダが、ハンドガンマグナギガに

連結、そして：

煌雅「吹っ飛びな」

BGM「怒りの日」

ズダダダダダダボオンボオンボオンビシュウツ！ビシュウツ！ビシュウツ！
 シュウツ！ガコツボボボボボボビュンヒュンヒュンヒュンヒュン

???「フツ！」バツ

ドゴオオオオオオオオオオオオオン！！！！

うああア！！ アイエエエ！！うわらば！！がアア！！

様々な断末魔と大爆発と共にジオン公国採掘基地だった燃え尽きた跡地は悲惨な状態であつた。

煌雅「こういうごちやごちやした戦いは得意じゃない…」

だがそんな大爆発の中で一機立ち往生しているかのような重装甲のガンプラが佇んでいた：がその後ろにもう一機そのガンプラを押し倒しほぼ無傷のガンプラが現れた！

ファイターD「うっ、あんた…いつからこんな闘い方を…」

???「近くにいた…お前が悪い。」

ファイターD「うああアア！！」バツ

